2023年度　浜松科学館ボランティア活動報告

ボランティア活動支援担当：横田 誓子、水谷 穂波、杉本 祐子

概要

2023年度の浜松科学館ボランティアは25名（一般10名、ジュニア15名）の新規メンバーが加わり、総登録人数は一般ボランティア20名、ジュニアボランティア28名の計48名となった。メンバーが増えたことで平均の活動人数も多くなり、ボランティア同士の交流も活発になった。昨年に引き続き「Mite Mite」や科学の学園祭、ボランティア交流会を実施したほか、新たな取り組みとしてサイエンスコミュニケーション研修、やさしい日本語研修を行った。今年度のボランティア活動の内容と、ボランティア向けに開催した研修について報告する。

1. 2023年度活動の概要

（1）年間スケジュール

4月～5月末	新規ボランティア募集 （広報はままつ、当館HP）
6月	面談 オリエンテーション
7月1日～	活動開始
9月・10月	サイエンスコミュニケーション研修 やさしい日本語研修
10月	科学の学園祭
12月	青少年の表彰 表彰式（浜松市役所）
3月	交流会

（2）活動内容

【ミニワークショップ・イベントの支援】

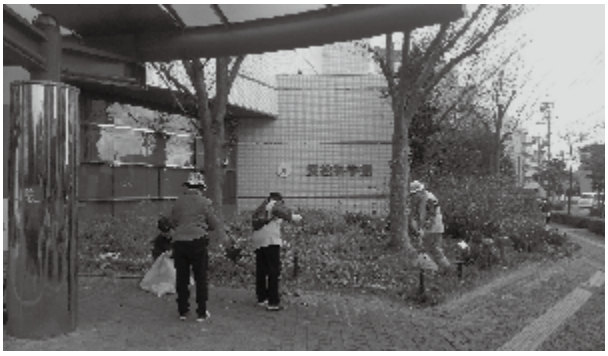
毎日開催しているミニワークショップの工作支援や、イベントの準備、補助を行った。参加者はボランティアメンバーとの交流を通じて、参加者が科学をより身近に感じる機会を増やすことができている。活動メンバーが増えたことで、支援がより充実してきたと感じている。

ミニワークショップ「どこまで伸びる？びよーんスライム」活動の様子

【自然観察園の整備】

月に一度、サイエンスチームの職員と共に自然観察園やサイエンスパークの草木の伐採、ゴミ拾いなどを行ったほか、園内に生息するアリやコケなどの生物の調査を行った。1月には、浜松城公園内のコケや地衣類の観察を行った。

自然観察園のフジの剪定

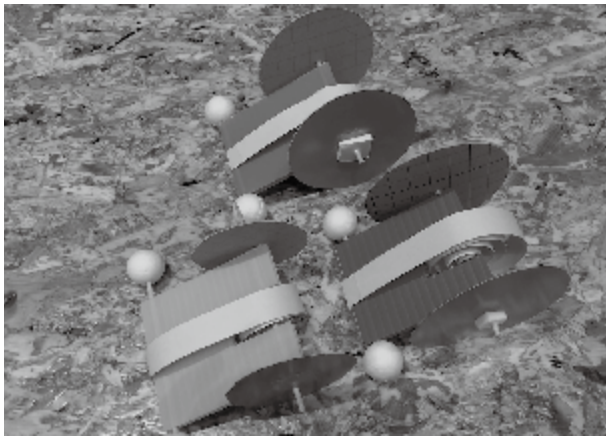


科学館入り口の整備

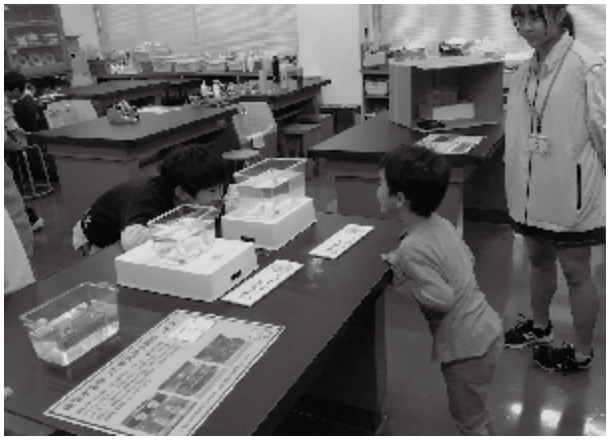
【自主イベントの企画・運営】

（1）科学の学園祭ブース出展

当館で毎年10月に開催している「科学の学園祭」に、工作・実験のブースを出展した。工作材料の準備や、当日の受付・説明などの運営をジュニアボランティアが主体となって行った。メンバー同士で作り方を教え合うなど、交流のきっかけとなった。



工作「くるくる紙ゼンマイカー」



実験「水と塩で蜃気楼の実験」

(2) Mite Mite（ミテミテ）

ボランティアメンバーによる自主企画・運営のイベント「Mite Mite」を、昨年度より継続して行った。来館者に見てほしいもの、やってほしいことなどを展示、解説するイベントで、「やってみて！体験してみて！読んでみて！・・」など、ためしに行う、挑戦するという意味をもつ「～てみる」から名付けた。今年度は入り口ゲート付近で展示や解説を行ったほか、新たに宇宙ゾーン、光ゾーンの展示についてモニターを使用した解説を始めた。入り口ゲートと比較すると、各ゾーンでの解説は人が集まりにくいといった課題はあるが、展示についてじっくりと解説を聞けるため、大人の方の参加も多い印象である。

○「音の実験」月 2 回程度実施

・音の足し算

・消えない水滴

・ピアノの音で動くひも

・0.001 秒を見る

内容：圧電スピーカーを使用して一定の周波数の音を発生させ、水や弦などを振動させることで見える現象を観察するイベント。ストロボを使用することで、弦の震えがゆっくりに見えるなど、日常生活では見られない現象が観察できる。

○「宇宙ゾーン 展示解説」9 月～

月 2 回程度実施

・ロケット、スイングバイのしくみ

内容：宇宙へ行く方法や、宇宙で移動する方法についてモニターを使用して解説。関連する常設展示を使ったり、参加者に声をかけたりしながら解説を行う。

○「光ゾーン 展示解説」11 月～
　月に１～２回程度実施
　・光の波長と技術

内容：紫外線、X 線照射装置に、常設が難しい栄養ドリンクなどの道具を用いながら、さまざまな波長の光について解説する。

【交流会】
今年度の交流会は、Mite Mite や科学の学園祭で活動したメンバーによる発表などを行い、1 年間の活動を共有した。また、ボランティア活動をテーマとした当館職員の研究発表を通して、博物館ボランティアの意義を伝えた。29 名が参加し、普段は顔を合わせないメンバー同士の交流の場となった。

2. 浜松市「青少年の表彰」

12 月 7 日 (木)　浜松市役所

浜松市が実施している「青少年の表彰」にて、ジュニアボランティア 3 名が表彰された。これは、市内居住の 25 歳未満の青少年を対象に、ボランティア活動や文化活動など、社会や他者のために努力している青少年や青少年団体（グループ）を推薦､浜松市の選考を経て、浜松市長より表彰するものである。
表彰された 3 人は、現在高校生。中学生で当館ボランティアのジュニアメンバーとなり、約 4 年間、継続的に活動してきた。科学館事業、運営のさまざまな場面で、科学の学習活動を通して、積極的に科学館に関わりをもつとともに、来館者（市民）と科学館をつなぐ

役割を果たしてくれている。博物館（科学館）ボランティアは、日常的に博物館に関わりをもつ利用者であり、コアなファンでもある。ジュニアボランティアの活動が、多くの来館者にとって科学や科学館を身近に感じる大きな力となっている。
今回の受賞で、科学館でのジュニアボランティアの存在や活動を多くの人に知っていただくとともに、ジュニアメンバーにとって、今後の活動や将来への大きな励みになることを願っている。

3. ボランティア向け研修の実施

ボランティア活動の充実を目的とした研修を実施した。多様な属性の来館者を迎える科学館では、話し方や伝え方に工夫が必要である。研修を通じて、科学館にはどのような人が来るのか、どのようなコミュニケーションを取ると良いのかを話し合い、考えた。

(1) サイエンスコミュニケーション研修
参加者：一般５名
ジュニア（高校生）２名
サイエンスコミュニケーションとは、コミュニケーションを通じて科学の魅力やおもしろさを伝える / 理解することを目的としたものである。ワークショップを通じて、ボランティア活動や日常生活の中でサイエンスコミュニケーションが必要な場面について考えた。

「サイエンスコミュニケーション」研修の様子

（2）やさしい日本語研修
参加者：一般５名
ジュニア（高校生）４名
「浜松市はどのような特色をもつ都市か？」
ものづくりのまち、海も山もあるまち、音楽のまち、気候が温暖で住みやすいまち…
さまざまな特色をもつ都市である浜松市は、外国人が集住するまちでもある。特にブラジル人住民の数は全国一。次いでフィリピン、ベトナム、中国、ペルー出身と続き、2024 年 4 月現在 87 か国の人たち（29,028 人）が住んでいる（浜松国際交流協会 Web サイトより）。
さまざまな背景をもつ人たちが暮らす浜松市に存する科学館として、まずは私たち（職員・ボランティア）自身が、浜松市について知ること、そして「伝える」ことに主眼を置きがちな科学館で、「伝わる」ためにはどうしたらいいかを考えることを目的に、対話につながる一つの手段としての「やさしい日本語」を中心とした多文化共生研修を実施した。
（研修内容）
「浜松市はどんなまち？」
「やさしい日本語とは？」
ワーク１「ひょうたん島問題 _ ひょうたん教育の危機」（７日）
※多文化共生シミュレーション教材「ひょうたん島問題」藤原孝章著（明石出版）使用
ワーク２「ソーシャルガイド作り」（８日）

「やさしい日本語研修」の様子

4. ボランティアアンケート

3 月に、活動に対する充実度調査として、評価指標 6 項目について、アンケートを行った。

（評価指標）
1 充実感を味わえた
2 知識や経験が豊かになった
3 さまざまな世代、年代のボランティアと交流できた
4 価値観を共有できる仲間ができた（ジュニア：科学

に対する興味や関心が深まった）
5 地域・社会に対する貢献ができた（ジュニア：浜松科学館を身近に感じるようになった）
6 地域への愛着心が深まった（ジュニア：地域への関心が深まった）

「充実感を味わえた」「知識や経験が豊かになった」は一般、ジュニアともに 95％と、活動に対する高い充実度が感じられた。また、ジュニアは「科学館を身近に感じるようになった」が 90％と、学校、家庭以外の居場所として通ってくるメンバーが多くいることを感じている。アンケート結果の詳細は、「令和 5 年度指定管理業務事業報告書」（P39）で報告しているので、参照願いたい。

5. おわりに

2023 年度のボランティア活動日数は、年間合計 130 日、開館日数（314 日）の 3 分の 1 を超えた。職員とともに、科学館のスタッフとして活動しているボランティアの存在は、来館者に科学館や科学を身近に感じていただくきっかけになっているのではないかと思われる。今年度は、浜松科学館の来館者支援を担っているボランティアが、科学館における「コミュニケーション」について考える機会を設けた。今後も、さまざまな活動の場を提供するとともに、メンバー自身の楽しみや学びにつながる活動を館全体で支援していきたいと考えている。